

7. 特別飼養鶏の死亡率増加に対する取組み

宇佐家畜保健衛生所 1) 大分家畜保健衛生所
○平松香菜恵、病鑑 人見 徹¹⁾、病鑑 森 学¹⁾、(病鑑) 長岡健朗

【はじめに】 鶏肉に安心・安全を求める消費者のニーズが高まるなか、Iスーパーチェーンの銘柄鶏「Bどり」は、生菌剤を活用し、抗菌剤を一切使わずに生産を行っている(特別飼養鶏)。管内には「Bどり」生産農場が16農場あり、県内最大の生産地となっている。「Bどり」は1kgあたり3円程度高く取引され、薬品代が掛からないメリットがある反面、細菌感染等で死亡が増え始めると有効な対策がないというリスクが伴う。当家保で2016年度～2017年度9月までに受理した延べ26件の死亡羽数増加の届出のうち、21件が「Bどり」の特別飼養鶏農家(9農場)であった。今回、届出を受けた特別飼養鶏農家9農場のうち複数のロットで続けて届出があった2農場について調査を実施し、対策を検討したのでその概要を報告する。

【調査と対策】

①A農場 飼養状況：4鶏舎の平飼いで飼養羽数32000羽、戻し堆肥方式。概要：これまで出荷率が100%を越えていたが、2016年11月入雛群の1鶏群、2017年3月入雛群の2鶏群で、いずれも30日齢前後で死亡率の増加が見られた。検査：病理解剖により筋胃びらんのある個体が認められた。ワクチン効果も確認したいとの要望を受け、鶏伝染性気管支炎ウイルス(IBV)、伝染性ファブリキウス嚢病ウイルス(IBDV)、鶏アデノウイルス(FAV)の抗体検査を行った。検査結果：IBV(TM-86株)、IBDV、FAV(血清型2型)の抗体価が上昇していた。対策：FAV等のウイルスの常在化を疑い、次回導入群では戻し堆肥方式は行わず新しいおが粉を導入したところ、30日齢頃に死亡率の増加はなく、出荷率が回復した。

②B農場 飼養状況：4鶏舎の平飼いで飼養羽数56000羽、敷料は毎ロット入れ替え方式。概要：3年前から30日齢時に首振りや脚を伸ばすような症状を呈し死亡個体が見られた。以前の検査結果からIBVの野外株やコクシジウムの関与を疑いワクチンプログラムの改善に取り組んできたが効果が見られなかった。検査：FAVなどの常在ウイルスの感染状況を調べるため、ウイルス中和抗体価の測定、血糖値・ビタミンなどの生化学的検査を実施した。検査結果：血糖値の低下、FAV(血清型1型)、IBV(JP I型)遺伝子を検出、異常鶏の血糖値の低下が確認された。ビタミン値は異常鶏と正常鶏で有意な差はなかった。対策：低血糖対策としてビタミン等を添加したが効果は認められなかった。次のロットではIBワクチン接種日齢の変更とブドウ糖の給与を検討。

【まとめ】 今回調査したA農場では新しいおが粉を導入することによって改善が見られた。一方、B農場は毎回オールアウト後に新しいおが粉に入れ替えておりA農場とは異なる原因によるものと考えられた。2農場では、いずれも30日齢前後で死亡羽数が増加しており、過去の届出をみてもこの日齢での飼養管理対策が細菌感染を起こさないために重要であると考えられた。今後も「Bどり」生産農場の立入調査を積極的に行い、安全・安心な鶏肉生産を支援していきたい。